

# OPPAを活用したことによる高校英語教師の授業に対する変容に関する研究

A Study on the Change of the Teacher's Attitude toward Teaching English  
in High School by Using OPPA

谷 戸 聡 子\*      堀      哲 夫\*\*  
YATO Satoko      HORI Tetsuo

**要約：**「OPPA(One Page Portfolio Assessment)」を高校英語の授業に取り入れてから、授業に対する教師自身の態度の変容が観察されるようになった。以前は正答のみを求める傾向が強かったが、シートの分析を通じ、頻発する生徒の間違いを許容できるようになった。さらに、今まで見過ごしていた生徒の間違いの徴候が、授業の様々な場面において敏感に察知できるようになり、逆に間違いを利用することで本質的な理解を促し授業力向上に役立てられるようになった。本研究では OPPA の事例を検証し、授業改善に有効な教師自身の授業に対する態度の変容について考察した。その結果、生徒に求める姿勢が「間違えないように学ぶ」から「間違えながら学ぶ」方向へ柔軟に変容したことが明示され、最終的には生徒の側にも「自発的にどんどん間違えて調べるとおもしろくなる。」という意識変化が見られるようになった。

**キーワード：**高校英語、OPP シート、OPPA、肯定的な間違いの捉え方、間違えながら学ぶ

## I はじめに

外国語学習で最も必要なことは、間違い<sup>1)</sup>を恐れず対象言語を使うことである。しかしながら、言うは易く行うは難しい。日本人にとってこのことは想像以上に難しく、人前で間違えることは恥である、という観念からなかなか逃れられない。これほどまでにグローバル化した社会において英語の必要性が叫ばれている今日、日本人の英語運用力が伸び悩んでいる最大の原因は、まさに、この間違いを恐れることではないかと思われる。その証拠に、日本に来る ALT で、間違っても人前で日本語をしゃべることを躊躇しない人ほど例外なく日本語が上達して帰国していく。生徒のみならず、英語教師に至っても日本人は完璧な発音や表現にとらわれ口が重くなり、英語の使用にしりごみする人が少なくない。

英語学習の成功の第一歩は、もちろん学習者自身が間違いを恐れないようにすることだが、それと同時に教師側も肯定的に間違いを捉える態度を育成する必要がある。また、いち早く進展の可能性の芽ともいうべき間違いの断片を見逃さずに察知し、効果的に利用する、間違いを察知する能力も必要である。問題は、長年培われた性向というものはいかんともしがたくなかなか直りにくいものであるうえ、ましてや、教師となって何十年もたってしまった今、果たして教師自身の、間違いを否定的に捉えてきた習慣的態度の軟化が可能なのか、ということである。

本研究では、授業改善の実は根幹ともいえる教師自身の態度変容を OPP シートの事例分析を通じて検証してみた。

\* 山梨県立甲府南高等学校 \*\* 教育実践創成講座

生徒の変容に関する OPP シートを活用した実践報告はこれまでも行われてきている<sup>2)</sup>。しかし、OPP シートを使用している教師側の変容についての報告はほとんど見られない。これは、生徒の変容の様子は OPP シートに記述として現れるため、事例を集めることができるが、教師の変容はシート上に形として出てこないため、検証が困難なことによると思われる。

そこで、OPP シートの利用が教師の授業に対する態度変容に有効であることを以下の点から実証したい。

一つめは、生徒の OPP シートの記述を見ることにより、頻繁に現れる理解度の不適切さを認識し、教師が思うとおりに生徒は決して学ばない、という現実を冷静に受け止め、教師の間違いに対する耐性を強める一助とできることを生徒の事例をもとに示したい。

二つめは、自身が収集した授業中のやりとり、質疑応答や問題演習過程における生徒の間違いの例について考察し、その間違いが発生する背景および原因を理解し、本質的な理解へつなげる活用方法を考える。正解のみを重要とし、生徒が間違えた事例を記録し収集することなどなかった OPPA 使用以前と比較すると、教師としての授業力が向上していることがわかる。問題演習等における授業中の誤りは、OPP シートには現れてこないため、教師自身に強い関心がなければ、それらを記録にとり、その後の授業で活用していくことはない。収集された多くの間違いの実例こそが、教師の関心が肯定的に誤りをとらえる方向に向いていく様を表している。

また、年度後半になって、生徒の記述にも間違いを肯定的にとらえる意識変化がみられるようになり、教師の意識転換が生徒の変容に効果を及ぼしていることを実証する結果となった。

## II 研究の目的

本研究の目的は以下の 3 点にある。

1. 高校英語授業において OPP シートを活用することで、生徒が教えたことを正しく認識していないケースがあることを知る。むしろ、授業を一回で 100% 理解することはまれである、という当たり前のことを再確認し、生徒が間違えることに対し寛容になり、生徒教師双方が間違えることに罪悪感を感じないような耐性をつける道具としての OPP シートの利用価値を知る。
2. OPP シート以外で収集した生徒の間違いの事例を分析し、OPPA を実践することにより培われた、間違いへの肯定的な捉え方（教師の自己変容）が、授業中や授業外の生徒とのやりとり全てに波及効果を及ぼし、誤りを察知する能力が敏感になり授業力が向上していく様を検証する。
3. 教師の間違いに対する意識転換が生徒の態度を変容させる効果があることを実証する。

## III 研究の方法

1. 調査対象 山梨県立 A 高等学校普通科 2 年生 20 人×3 クラス 計 60 名
2. 調査期間 平成 24 年 4 月 12 日～平成 24 年 10 月 31 日
3. 調査方法

### (1) 授業の進め方

2年生の英語ライティング授業において、教科書「English Writing『PRO-VISION』(桐原書店)」を使用し、文法項目や機能の確認、またそれらを使用した英作文演習を行った。生徒の自力による予習を中心とした授業になるよう心がけ、ペアワークやグループワークで仲間同士誤りを修正する活動を組み合わせ、生徒の疑問点や不明点が明確に浮かび上がるように構成した。年間を通じて、できるだけ間違えないように演習問題に取り組むのではなく、間違いを恐れず、参考書や辞書を手がかりに自力で予習し、またそれを人前で発表することを目標にした。進度は1課につき2時間をかけた。

### (2) OPP シートの活用

OPP シート(後述図1)は、(1)学習前の目標習得事項についての事前知識、(2)毎回の授業における本時の最重要事項、疑問点、及び感想、(3)単元終了時の学習後の上記(1)の項目についての再記述、(4)学習前・中・後を振り返っての自己変容について、を記述させるように作成した。毎回の45分授業の中でOPPシートを記述する時間を5分程度確保した。OPPシートは、毎時間回収し、記述内容に下線やコメントをつけるなどして次の授業で返却した。今回は1つの学習項目について2時間の速さで次の課に進むので、事前事後の評価よりむしろ形成的評価である毎回の授業の生徒の記述に注目するようにした。その中から、授業中教えたことを正しく認識していないと思われる記述を抽出し、教師の自己変容に寄与するか、検討した。

## IV 授業で使ったOPPシート

### 1. OPPシートのねらい

本授業で用いたOPPシートは、その構成要素を「学習前・後における学習単元の把握に関する問い」「学習履歴(学習の記録)」「自己評価」「授業評価」「(教員からの)他者評価」を含む)とした。2年生英語ライティングについては、それぞれの課で英作文に使用すべき目標文法事項が機能とともに提示されている。1課につき2時間で進むので、毎回の生徒の記述欄(学習の記録)に焦点を置き、自分の現在の理解度が自己認識できるようになること、さらに実際はそれが生徒が無意識のうちに行っている授業評価であるため、それを回収して見ることにより授業で教師が意図したことが理解されているか確認し、今回は誤った認識と見られる記述を抽出することで間違いに寛容な姿勢を養い、授業改善に役立てることをねらいとした。

### 2. OPPシートの構成要素

今回使用したOPPシートの構成要素は以下の3点からなる。

#### (1) 学習前・後における学習単元の把握に関する問い

学習前・後における生徒の学習単元内容の把握に関する問いは、図1中の「(学習前)～はどういうことだと思いますか。」「(学習後)～はどういうことだと思いますか。」の欄である。これは、生徒の学習前の既有知識および認識と学習後の理解度および到達度を比較する問いである。ただし、今回の2年生ライティングについては1課にかける時間が2時間と少ないため(1)の問いを設定することが難しく、従って(2)の学習履歴を記述させることに重点をおいた。

## (2) 学習履歴（学習の記録）

図 1 中の「この単元で一番重要だったことを書きましょう。」「疑問点や感想など何でもよいので自由に書いてください。」の欄。授業で何が分かったのか、何がわからなかったのかを毎時間記述する。自分の学習過程を自己評価する欄。授業の理解度が記述されるので今回の研究では最も重点的に観察した項目である。ここで上がってきた質問や疑問を次の授業に反映させることで、授業の軌道修正ができ、さらに生徒の記述を「授業評価」として把握することができる。また、毎時間回収して目を通し、下線やコメントをつけて返却することにより、生徒は教師からの「他者評価」も受け取ることができ、生徒の内省を促すことができる。

## (3) 自己評価

図 1 中の「君は何か変わったかな？ 学習前・中・後を振り返ってみて、何が分かりましたか？ また、今回の勉強を通してあなたは何かどのように変わりましたか？ そのことについてあなたは どう思いますか？ 感想でもかまいませんので自由に書いてください。」の欄。学習前に「わからない」という自覚が強いほど、最終的に理解に達したときの自己効力感が強く表現される欄である。

## 3. OPP シートの内容

実際に用いた OPP シートは B 4 一枚の用紙の表面に印刷したものである。図 1 は生徒が実際に記入した OPP シートである。

# V OPP シートを活用した英語授業の内容

## 1. OPP シートを活用した授業の具体的な学習内容

表 1 に OPP シートを活用した授業に用いた教材等を示した。

表 1 授業に用いた教材、学習項目、授業時数、授業内容

教 材	教科書 English Writing「PRO-VISION」( 桐原書店 ) 「総合英語 be」(いいずな書店) 併用
学習項目	各課に示された機能シラバス及び文法シラバスによる項目
授業時数	45 分授業を週 2 回。1 課を 2 時間のペースで進む。
授業内容	各レッスンにはその課の英作文で使用する文法項目（否定、分詞、時制など）と機能（勧誘、依頼の表現など）が提示されており、生徒は空所補充などの部分英作文や並び替え、和文英訳などの教科書に示された演習問題を解いて授業に臨むことを前提とする。授業では、1 時間目は主に文法項目について解説し生徒の疑問に答えたり、空所補充や並び替えなど部分英作文を中心に黒板にペア毎に解答を書かせ、質疑応答しながら確認する。2 時間目は和文英訳タイプの英作文を同一問題に対し複数のペアをあて黒板に書かせ、比較しながらお互いに添削し合ったり、教師の質問に答えたりする。



**幸せになるための英 学習履歴表**      年 組    )氏(

⑥ 学習前  
学ぶとはどういうことだ  
と思いますか？

意思表  
通る道に迷わずに歩きます

日付	この単元で一番重要だったことを書きましょう。	疑問点や感想など何でもよいので自由に書いてください。
① 4月12日(木)	not + never の位置 部分否定の制約距離 <span style="color: red;">①</span>	little + few の使い分け 部分否定の決まりを言いたくしに 注意したいです。 <span style="color: red;">②</span>
② 4月13日(金)	否定の言いまわし、二重否定 → 具体的に	否定する語がどこにかかっているのかを 見定められるようにしたいです。 <span style="color: red;">yes.</span>
③ 4月19日(木)	sec 17 さまざまな表現 使役動詞 let + have. so ~ that ... 構文 <span style="color: red;">practice</span>	使役動詞の使い方(動詞の原形をおくなど) に気をつけたいです。 暗唱したてきた単語を忘れないようにします。
④ 4月20日	時制の一致、tell & say の違い	もともと過去形だった文は 時制の一致で過去完了になることに 気をつけたいです。 <span style="color: red;">ズレてね。</span>
⑤ 4月26日	言三法、直接語法と 間接語法の書きかえ	間接語法で、過去形、た形動詞が 過去形、this が that + here が there に なるのに注意します。 <span style="color: red;">そーでいい</span>
⑥ 4月27日	直接語法 ⇄ 間接語法 tell 人 to do tell 人 that ask 人 to do <span style="color: red;">③</span>	直接語法は say たけでも、 間接語法になると ask, tell, advise など さまざまな形をとるのを見定められ たいです。
⑦ 5月11日	時刻 ・現在形 → 「不変」 ・過去形 → 「～している」 <span style="color: red;">③</span>	最初めとこころに居たので、新しい気持ちで 今までのことを再確認し、 <u>確実に書き</u> をなして いきたいです。

⑦ 学習後  
学ぶとはどういうことだ  
と思いますか？

新たな知識を受け入れて、  
自分をさらに高めた。

**君は何か変わったかな？**

学習前・中・後を振り返ってみて、何がわかりましたか？また、今回の勉強を通してあなたは何がどのように変わりましたか？そのことについてあなたはどのように思いますか？感想でもかまいませんので自由に書いてください。

一年前にやったことなのに、あれとあつたかな所があったので、  
じつと2年のうちに英語の基礎をきかめたみたいです。

今わかったと決心することなく、復習して完璧に身につけること  
忘れないようにします。いつもでいいよ

図1 授業で使ったOPPシートと記入例 (M. K.: 女子)

次に実際に行った学習手順を表 2 に示す。

表 2 基本的な学習手順

1	あらかじめ予習により与えられた問題を自力で解いてくる。参考書や辞書の使用可。
2	ペアまたはグループを組み、相互に相手の解答を話し合う。(正答提示なし)
3	ペアまたはグループで黒板に解答を書く。意見を述べ合う。教師による解説など。
4	毎時間授業の終わりに、授業で一番重要だったこと、疑問点や感想を OPP シートに記入する。

学習はこの手順を繰り返す。

## VI 本研究の結果と考察

### 1. 生徒が授業で教わったことを正しく認識していない記述について

OPP シートの学習履歴の記述（この単元で一番重要だったこと、疑問点や感想）から、生徒は理解したとしているが、教師側から見ると授業で教えたとおりに正しく理解してはいない、と思われる記述を取り上げ検討する。教師の多くは自分が教えたとおりに正しく生徒が理解していると思いがちだが、生徒はそれぞれの背景で受け取るため、必ずしもこちらの思った通りには受け取らない。そのことを認識していないと大きなずれが生じてしまうので、生徒が授業とまったく的がはずれた記述をしてくことに耐性を持ち、間違っても肯定的に教師が受け取れるような態度の育成に OPPA を役立てる。なお、ここにあげた誤った理解の事例については、その次の授業で補足、修正し、即座の授業改善にも役立てている。

以下生徒の事例について解説する。

部分否定について not all を誤解していると思われる事例（図 1）である。いつも～とは限らない、全て～とは限らない、といった部分否定が、全てが～ではない、という全文否定と混同してしまったと思われる。また、図 2 より、in order to はていねいな表現、との記述が見られるが、正確な理解とは言いかねる。おそらく単独の to 不定詞の目的用法より語の数がたくさん使っていることからそのような記述になったかと思われる。

図 3 については、おそらく助動詞を使った受動態を習った際、やや混乱したと思われる。

図 4 の「feel 動」も誤った認識だと思われるが、feel が be 動詞として使われる、というのも誤解がある。おそらく補語が形容詞の英文のことだと思われる。

図 5 については、他動詞という点に着目しているところは評価できるが、meet と promise の語法の違いについて理解がやや正確ではない記述である。

図 6 については何をもって let と現在完了を結びつけたのか推測不能である。本人があとから見直しても何に言及しているのか理解できないのではないと思われる。

他にシートに現れた事例では、表 3 に示したものがあげられる。

表 3 の事例は、「I ( ) a bath when you called me. 空所に take を適切な時制で入れる問題」では「was taking (過去進行形)」に直して入れる、のが解答だが、説明したあとの OPP シートで「when は過去進行形と一緒に使うことがわかった。」という記述が続出した。when が常に過去進行形と一緒に使われるわけではないため誤った認識をしている。

以上の OPP シート学習履歴からあらわれた生徒の記述から、英作文の基礎となる文法事項の理解



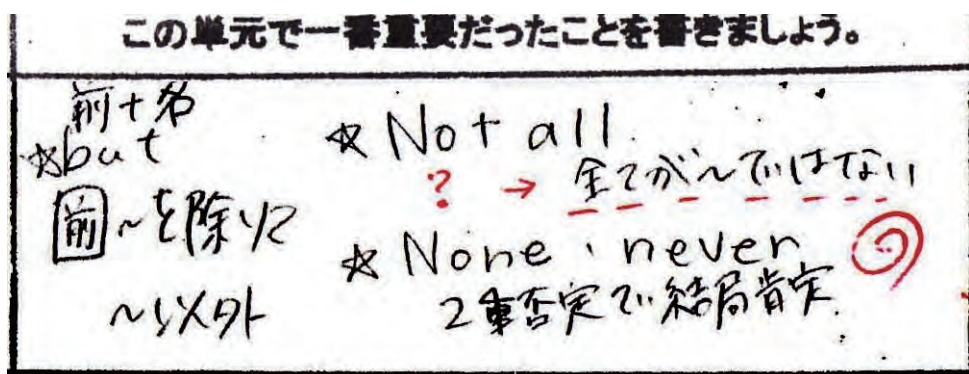


図1 部分否定と全文否定を混同している事例 (Y. N.: 女子)

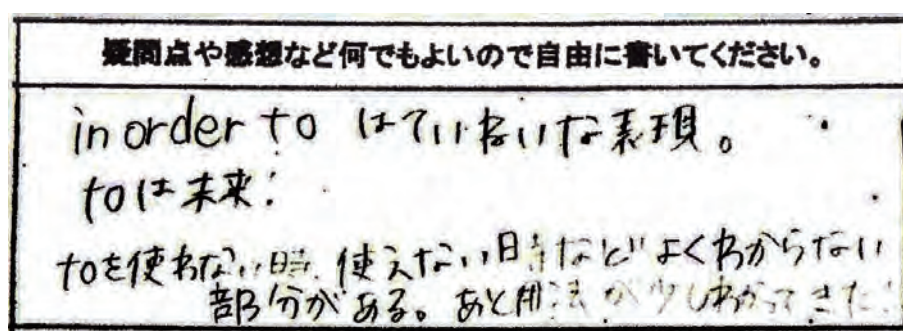


図2 「in order to はていねいな表現」と記述してある事例 (Y. N.: 女子)

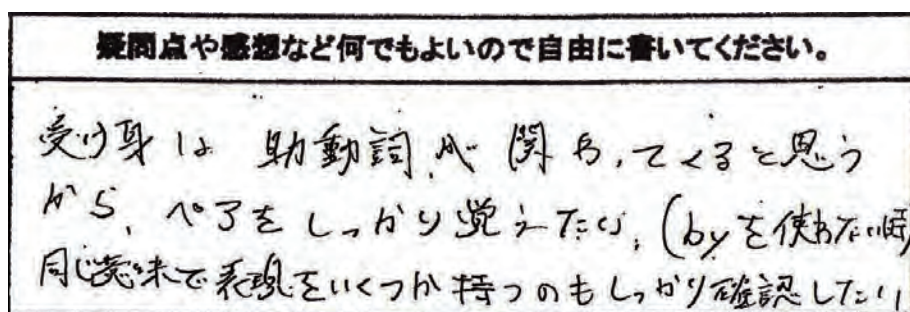


図3 「受け身は助動詞が関わってくる」としている事例 (Y. N.: 男子)

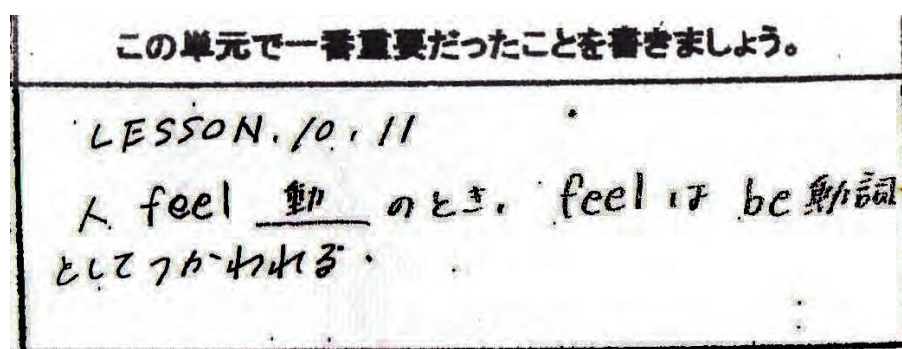


図4 「人 feel 動の時 feel は be 動詞として使われる」としている例 (N. M.: 女子)

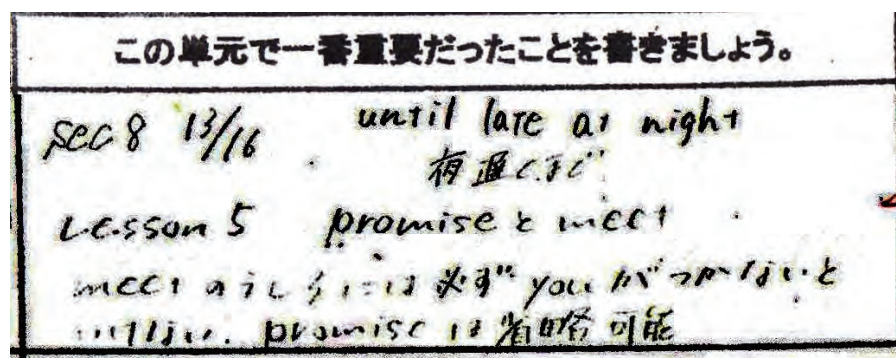


図5 「meetの後ろには必ずyouがつかないといけない。promiseは省略可能」とまとめている事例(N. M.：女子)

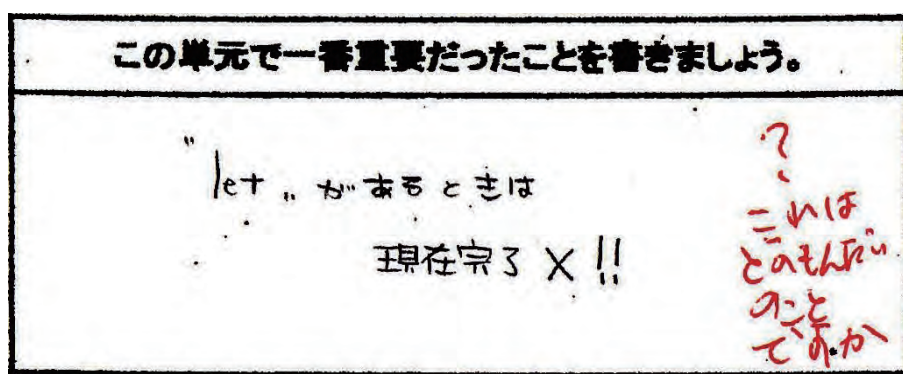


図6 「letがあるときは現在完了×」としている事例(A. M.：女子)

表3 文法問題で理解が正確ではないと見られる事例

問 題	“I ( ) a bath when you called me.” 空所に take を入れる時制の問題
正 答	take を過去進行形にして was taking にする
生徒記述例	「when は過去進行形と一緒に使うことがわかった」複数

について、ただわからないという漠然とした状況ではなく、理解しようと努力しているが、自分なりに解釈した結果、正確な理解に至っていないことがわかる。従ってその間違いを生かして正確な理解に導く方策を考えることが可能となるはずである。

## 2. OPPシートを使うようになって気づきだした生徒の誤りの事例と原因および対処方法

実際の授業では、授業中の問題演習の間に間違いが出現する。間違っただけでいい、という雰囲気を作らないことで積極的な表出につながり、その間違いを利用することで本質的な理解に活かせる。OPPA の考えを導入し始めてから、取り入れる前は見逃していた間違いに敏感に反応できるようになり、それを記録して授業にいかせるようになった。

以下、表4にOPPシートを使うようになって気づきだした生徒の誤りの事例とその推測される原因、及びそれを本質的理解につなげる対処方法をまとめた。

このような誤答例文は大人が考えようとしても考えつくものではない上、真実を含んでいるので、生徒の共感を呼び、本質的な理解を容易にする。間違いを受容できる素地を作るために役立てるこ



とが出来、また、授業中の間違いの出現に対し、上記の場合分けを頭に入れておくことで、大切な生徒の間違いを無下にせず、有効に生かすことがとっさにできるようになると考えられる。これは教師の授業改善にとってきわめて重要な視点の一つであると考えられる。

### 3. 教師の意識転換が生徒の意識変容に影響する記述について

ここからは予期しなかった結果であるが、生徒の間違いを咎めず、できるだけ率直に間違いを表出させ、それをきっかけに本質的な理解を促そうと努めてきた結果、年度後半になって、生徒の側からも間違いを肯定的にとらえる記述が現れるようになったことを報告したい。

図7の生徒は、10月12日付で「ひっかかることをなくしていきたい」とあるように、授業中の自分の間違いをなくしたい、と記述しているが、10月16日には「ひっかかることが大切なんです」と間違いを肯定的にとらえ、本質的な理解につなげようとしている意識変容が感じられる。また、図8の生徒においては、10月24日付で「英語は自発的にどんどん間違っ（自分で）調べるとおもしろくなる教科だと思った。」と日本語で記述してあり、さらにそれに続けて「I want to get a great vocabulary by many mistakes.」と、英語で書いている。間違いを活かして語彙の増強を図りたい、という記述であり、まさにこちらの意図を見抜いたかのような、間違いを肯定的にとらえることが学びの本質、すなわちおもしろいにつながることを実感したという記述例である。多くの生徒、教師に根強く残る「間違えないように学ぶ」姿勢から「間違えながら学ぶ」姿勢へ変容していったことが明らかであるということが出来る。教師がOPPシートの活用により、間違いを容認するようになり、それを生かす方向で授業改善していった結果、生徒にその意図が伝わった証拠であろう。

## VII おわりに

本研究を通じて、高校英語授業でOPPAを取り入れ、OPPシートの生徒記述を分析した結果、生徒が自分では理解していると思っている授業内容を実は正確に理解していない事態を確認でき、（だから、わからない人は手をあげて、という呼びかけは無意味である。本人はわかっていると思っている。）さらに教師はそれをむしろ肯定的に受け止めることによって、生徒教師双方とも間違いに寛容になれば、本質的な理解に進む糸口となることを検証した。また、その波及効果として、授業を含む日常生活のあらゆる場面にひそむ進展の可能性、すなわち「間違い」を察知し見逃さず利用できるという教師の授業力向上につながるということがわかった。多くのベテラン教師は経験則により、授業中の思いがけない生徒の反応に対し、あわてることなく前向きに生かす、という対処方法を身につけているが、OPPシートの活用で、自分の間違いを察知する能力を磨くことにより、まだ経験値の蓄積が浅い若手教師も、突発的な生徒の誤答をあやうく見捨ててしまうことなく、有効に生かすことが出来ると思われる。最後に今回の研究の目的からははずれるが、教育の最終目標と言ってもよい自立的な学習者の育成に関与する生徒の事例をもう1例あげたい。

この図9に示した生徒は、Readingの教科書の英語表現についてシート上で質問している。質問は的確を射た良い質問であるが、教師も時間的余裕がなく「そりゃそうね」などという、回答とは程遠い、極めてあいまいな合槌しか返していない。それに対して翌日自分で辞書をひいた結果を書いている。stand guardは成句で、それ自体で成立している表現と思われるが、自分で納得がいくような回答を自力で導き出しているところは学習者として自立していることの表れと見ることが出来る。教えなかったことが功を奏した、という典型的な例である。むしろ日頃教えすぎている、すぐに答えを与えすぎていることへの自戒ともいえよう。

結局のところ、生徒たちは自分で解決法を探し出すことにより自立していくのではないかと考え

表4 OPPシートを使うようになって気づきだした生徒の誤答例、原因及び対処方法一覧

	生徒の誤答例	原因	対処方法
A	It is believed that the robber escaped via Heathrow Air Port. (その泥棒はヒースロー空港を経由して逃げたと思われている) の和訳で「うさぎは羽田空港から逃げた」との解答。	未知語を既有知識として持っている単語と誤認し、つじつまをあわせることによっておこる。robber 泥棒 → rabbit うさぎ Heathrow Air Port → Haneda Air Port。	単語の最初の部分だけで違う単語と認識する間違いは、多くの日本人が実体験として持っているので、注意を喚起する誤りの例として利用すると理解しやすい。
A'	The teacher is looked up to by the students. (その先生は生徒から尊敬されている) の和訳で「先生は生徒に閉じ込められている」との解答。	(A) と同種の既に知っている単語と誤認する間違い。looked up を locked up と誤認したと思われる。	初級者の間違いとして多く見られるのはきちんと最後まで文字を読んでいないことである。looked up to の to まで注意深く見るよう注意を喚起する点において (A) と同じ。
B	close game 「接戦」という語が出てきたので、形容詞 close の理解を深めようと、close friend とはどんな友達か聞いたところ、「ひきこもり」(答えは親友)。	既有知識 close (動詞: 閉じる) と思って考えた誤り。英語には1つの単語に複数の品詞や意味があることの理解不足による。	close (形容詞) の意味と発音を動詞と比較して確認する例として使用できる。ただし、日本語「ひきこもり」については、配慮が必要な場合があると思われるので注意する。
C	The mystery novel was thrilling, and it made me awake all night. (その推理小説はとてもおもしろく、一晩中読んでいて眠れなかった) の和訳で「そのなぞめいた小説はぞくぞくした。怖くて一晩中眠れなかった。」との解答。	未知語はないが、自分の既有知識の枠組みで話を創作することによる。thrilling を「恐怖」と思ったことからつじつまをあわせることによっておこる。	英語は多義語であり、ぴったり合う日本語を探し出すのが難しい。推理小説を胸躍らせて徹夜で読む、といった体験が不足している、つまり経験値や枠組みがないことも原因なので経験や背景知識の大切さをわからせる好例。
D	That story sounds interesting, but I can't believe it. (その話はおもしろそうに聞こえるが、信じられない) の誤訳で「その小説はおもしろいと聞いていたが信じられない」他に The homework was more difficult than I had expected. の誤訳: 思っていたより宿題は多かった。	英文の構造を正しく把握していないため、知っている単語をつなぎあわせ、話を創作してしまうことでおきる。	基本的な英文の構造、特に主語と動詞の関係を把握することが英文理解には最も大切であることを示す好例。
E	I traveled by Greyhound bus to the south. の誤訳: 僕は足の速い獵犬で南へ旅行した。(Greyhound はアメリカのバスの名前) 他に shoe polish [靴墨] をポーランドの靴、と誤訳するなど。	辞書で先頭の訳語を適用してしまい、つじつまをあわせることによっておこる。文化的背景知識の不足も原因。	背景知識の不足や辞書の引き方がわからず、英語が嫌いになる生徒が多いため、これも経験値をあげるための好例。多くの誤答事例にふれることは効果的。
F	「私の兄は美術部にいます My brother belongs to the art club.」の英訳で belong ではなく enter をつかう。	日本語に影響されておこる間違い。語感と語法を身につけなければならないので克服に時間がかかる。	頻発する間違いではあるが外国語を学ぶ際の高いハードルの1つなので、これこそ間違いながら例文を提示することが解決法である。

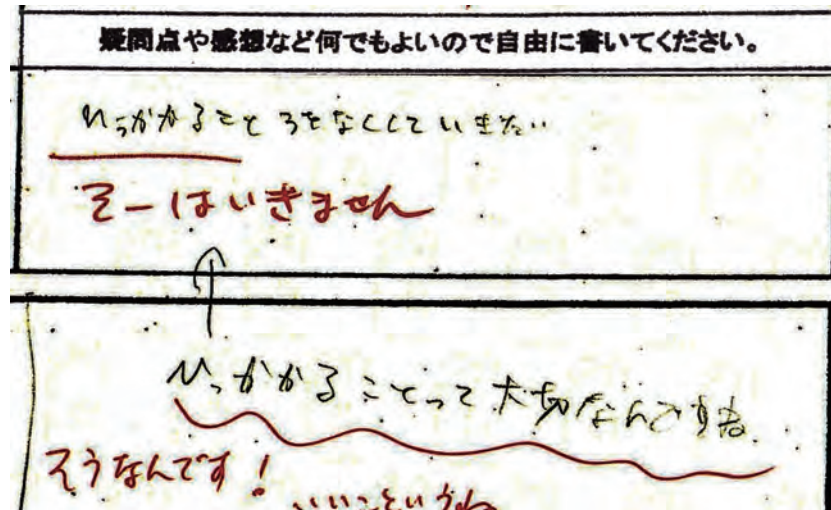


図7 「ひっかかることをなくしていきたい」という自分のコメントに対して後日「ひっかかることが大切なんですね」と自分で答えている例 (K. O.: 男子)

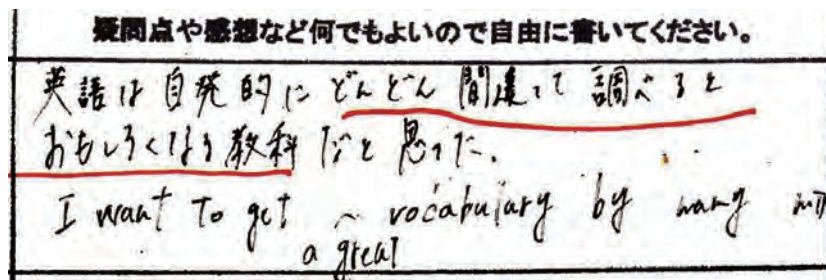


図8 「英語は自発的にどんどん間違えて（自分で）調べるとおもしろくなる教科だと思った。I want to get a great vocabulary by many mistakes.」という間違いを肯定し、前向きに生かす姿勢があらわれた記述の例 (R. K.: 男子)

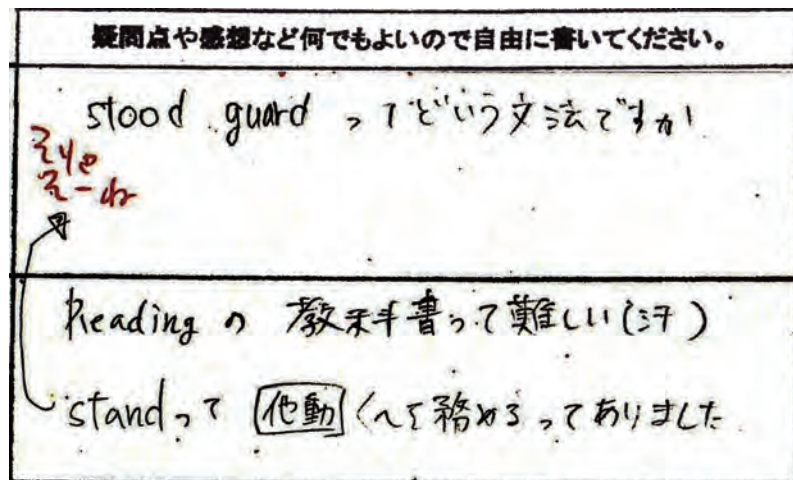


図9 自分の質問に次の日に自分で答え自己解決した例 (K. N.: 男子)



られる。放っておいても子は育つ、という見本のような記述だが、この事例からわれわれが読みとらなければいけないのは、放っておいても自分で解決できるように育てるのが親や教師の重要な役目ということではないだろうか。

生徒の誤答という鉱脈を掘り当て、教師の意識改革を促す OPP シートの活用法といい、OPP シートにはまだまだ使用者の思いがけない側面を炙り出してくれる新たな可能性が期待できるといえるだろう。

## 附記

本研究は、下記の分担により行われた。研究の企画と授業実施は谷戸が、OPP シートの骨子は堀が作成した。谷戸が執筆した論文に堀が加筆修正した。

## (註)

(1) 生徒の教科英語に関する不適切な考えや知識を「間違い」とした。理科教育では、理科に関するそれを「素朴概念 (naïve concept)」「ミスコンセプション (misconception)」「代替的概念枠組み (alternative framework)」などという用語が用いられている。教科英語では、用語や単語のみならず文法などの不適切な知識や考えも含まれるため、本稿では「間違い」という言葉を用いた。これに関しては、今後、十分な検討が必要であると考えられる。

(2) 谷戸聡子・中島雅子・堀 哲夫「OPPA を活用した高校英語の授業改善に関する研究－高校 1 年「関係詞」の単元を事例にして－」『教育実践学研究』No.17、pp. 34-44、2012

## (参考文献)

堀 哲夫『学びの意味を育てる理科の教育評価』東洋館出版社、2003

堀 哲夫「学習履歴を中心にした大学の授業改善に関する研究－OPPA を中心にして－」『教育実践学研究』No.14、2009

堀 哲夫編著『子どもの学びを育む一枚ポートフォリオ評価：理科』日本標準、2004

Hori Tetsuo, The Concept and Effectiveness of Teaching Practices Using OPPA, *Educational Studies in Japan: International Yearbook*, 6, December, pp. 47-67, 2011.